

音 楽 科

乗 富 章 子
今 井 直 人
荒 木 泰 彦

1 音楽科における集団で学ぶよさ

(1) 音楽科教育の目的と「楽しさ」

音楽科では、子ども一人一人が音楽に対する感性を働かせ、主体的に表現活動を楽しみ、生涯にわたって音楽を愛好していく子どもを育てることが求められている。

そのために、私たちはこれまで「音や音楽の世界の楽しさを味わうこと」を本質としつつ、「楽しさを感じながら自分の音楽的感性を高めていくこと」を基礎・基本として実践を重ねてきた。ここでいう「楽しさ」とは、子どもが音や音楽にかかわる活動（音楽的活動）をする過程で感じる心地よさ、安らぎ、感動、達成感、充実感などである。そして音楽科の授業のみならず、すべての「音楽」にとって「楽しさ」はそれ抜きでは考えられないほど大切な感覚であるといえる。

(2) 集団で学ぶよさと「楽しさ」

音楽科の授業では、学年や学級全体で活動を行う場合もあれば、少人数のグループやペアを組んで行う場合がある。そこで、個と個の集まりを集団とし、個は集団に対するものととらえている。

さて、音楽を学ぶ中で得られる上記の「楽しさ」は、自分の音楽的技能の向上によってのみ得られるものではない。友だちと一緒に音や音楽にかかわることによって、友だちの技能も向上すると同時に、友だちのよさを味わうことができるし、自分とは違うよさに触れることもできる。これらのよさは共に学ぶからこそ得られるものである。

言い換えれば、子どもの個としての音楽的な高まりと共に集団も音楽的に高められ、しかも自分とは異なる他者のよさも知り、他者とは違う自分自身のよさが自覚できるようになってこそ本当の意味での「楽しさ」を味わうことができると考える。

このように個も集団も高まっていくと同時にそれぞれの個のよさが自覚できるような、「楽しさ」にあふれた音楽科の授業を私たちは求めていかなければならないと考えている。

従って、音楽科の授業における集団で学ぶよさとは、次のようなこととらえた。

個も集団も音楽的に高まり 子ども同士が互いのよさを自覚しながら 音楽する楽しさを分かち合うことができること

(3) 集団で学ぶよさと

「音楽的に高まる」ということについて

それでは次に、前の項で述べた「音楽的に高まる」とはどのようなことなのかについて述べたい。

子どもが心地よいと感じた音や音楽を、子ども自身が受け入れ、自分のものとしてさらに心地よく美しくなるよう働きかけていくことが、「音楽的に高まる」ということである。そしてそれは、子ども同士が互いに自分の感じたことやこうしたいと思ったことを表現や鑑賞を通して共感し、交流し合う中で実現されていく。私たちが本質や基礎・基本でうたっている楽しさは、音や音楽の心地よさや美しさを、友だちと一緒に、ときには一人で試行錯誤しながら追求していく中にあると考える。その追求の過程を音楽科の学習とする。

2 集団で学ぶよさが息づく

授業へのアプローチ

「個も集団も音楽的に高まり、子ども同士が互いのよさを自覚しながら、音楽をする楽しさを分かち合うことができる」という集団で学ぶよさをより豊かに実現していくためには、授業の中に「音楽的に高まったことが自覚でき、楽しさを十分に味わうことができる場」を設けていくことが大切である。

このような場を意識的に計画し、以下の三点を有効に機能させることで、集団で学ぶよさが息づく音楽科の授業を追求したいと考える。

(1) 学びのシェアのプロセスとのかかわりから

私たちは、学びのシェアについて考えるにあたり、子どもが学習の課題をつかんでそれに向かって学習を進めていく中に、

つかむ → もとめる → ひろげる という三つの過程を仮に設定し、それぞれスパイラルにかつ関連しながら音楽的活動をくり返して豊かな表現をめざしていくというプロセスを考えた。

「つかむ」過程では、学習の素材である音や音楽に子どもが主体的に向き合い、集団での学習課

題をつかむために、表現や鑑賞の活動を十分に行う必要がある。

それには、子どもが大きな魅力を感じ、積極的に自分から他者に働きかけると同時に、音楽的活動にも主体的に向き合うことができるように教材との出会わせ方を工夫する。たとえば、さまざまな編曲による教材曲を鑑賞させる、一人一人の感受の仕方やイメージをできるだけ大切にして十分な音楽的活動を保障する、イメージをつかみやすいように音素材にとらわれず広く資料を提供するなどである。

その上で、自分なりにその音や音楽のよさを感じ取ることができれば、子どもは新たな課題を求めて他者との交流を願うようになると思われる。それが「もとめる」過程の活動である。

「もとめる」過程では、音楽的活動を通して感じ取った気づきをもとに、表現の工夫をするために、学習の課題を自分の課題として明確にとらえられるようにする必要がある。なぜなら、「つかむ」過程でよさを感じ取ったとしてもそれが漠然としていて具体的な表現の工夫につながらないことがあるからである。子どもが感じ取った気づきを音楽的な要素に結びつけるような指導が求められる。その結果、自分の課題を明確にとらえられる。課題を明確にとらえることができれば、他者との共通点や相違点にも気づき、楽しさを十分に味わうことができるであろう。

そのためには、意図的、計画的に音や音楽の特徴（音楽的要素）に気づくような場の設定が大切である。ここで自分自身のよさや楽しさを他者と交流しあうことができるような支援を行うことでさらなる音楽的高まりが期待できる。

「ひろげる」過程では、自分のイメージに合った表現方法を選択したり工夫したりして音楽的活動を楽しむことができるようになる。子どもは、「自分はどのような表現をしたいか」というはっきりとした意図をもって活動をするようになる。たとえば「明るく弾むような演奏にしたい。」という表現意図をもったとき、子どもは速さ、楽器の音色、強弱などに気をつけて様々な表現方法を工夫しようとする。そこで他者のよさや音楽的な感覚を広く肯定的に受け入れ、さらに自分の音楽的な高まりにつながることを期待する。

(2) 規範とのかかわりから

今年度は、私たちが求める音楽科としての規範を次のように考えることとした。

- ・素直に反応する
- ・活動を心から楽しむ
- ・他者の表現を共感的に聴く
- ・互いの共通点や相違点に気づく
- ・他者の表現のよさを自分に生かす
- ・より豊かな高まりをめざして意欲的に取り組む

このような規範を、楽しさを感じながら音楽的感性を高めていく音楽科の授業を進めていくことの中で培っていく。そして、集団で学ぶよさである「個も集団も音楽的に高まり、子ども同士が互いのよさを自覚しながら、音楽する楽しさを分かち合う」姿の実現をめざしていく。

これらを、学年の発達により、教師が積極的に作ろうとする段階から子どもが自ら作り上げていくようになっていくことを願っている。

(3) 評価について

音楽科では、以下の二つの観点で評価を行い、それを子どもに返していくようにしたいと考えている。一つは「音楽的高まりの評価」であり、もう一つは「他者とかかわる評価」である。

「音楽的高まりの評価」は、まさに音楽科の集団で学ぶよさに直結する評価である。子どもの「音楽的高まり」そのものが評価の観点となり、子どもが音や音楽とどのように向き合い、その結果、個も集団も音楽的に高まったかどうかを問うことになる。それぞれの題材のねらいに沿って作られた観点に基づいた評価を行っていく。

一方の「他者とかかわる評価」は、子どもが音や音楽と向き合うときに、いかに他者と交流しようとしたかについての評価である。授業の形態において、ペアを組む、グループに分かれる、学級全体で取り組むなどのかかわり方がある。その中で他のよさを認めながら音楽的な気づきを互いに共有し合い、共感し、より主体的に音楽に向き合うことができるようになったかを評価していく。

これら二つの評価は、子ども自身が音楽的活動をしながらすすめる自己評価を生かす場合と友だちとの相互評価や教師からの助言など、他者からの評価を子どもに返す場合がある。他者からの評価や助言は自分の表現や自分の取り組み方を見つめ直すよいきっかけになる。さらに録音やビデオ撮影などによる客観的な評価も必要に応じてとり入れていく。

これらの評価を活かしながら、子どもが本来持つ音楽的な資質・能力をさらに高めるよう継続的に検証を重ねていきたい。

3 実践例 — 6年—

5年生の頃からいつも和気あいあいと歌ったり楽器を演奏したりと音楽が大好きなクラスであり、また学習活動の中で子ども同士のかかわり合いが薄い集団というわけでもなかった。しかしそれは友達の演奏を共感的に聴く、あるいはみんなが照れたり恥ずかしがったりせずにいっしょに歌って盛り上がるといったかかわり方であり、よりよい表現を求めようとして一人一人が対等に思いを出し合ったり、時には批判的に聴いたり、また独自の工夫をしたりというような場面はあまり見られなかった。

音楽の嗜好や得手・不得手、得意な楽器などについても子どもによって様々であるが、その上で、知らなかったジャンルの音楽を聴く、演奏する、比較しながら聴く、その楽曲の背景を知るなどといった、音楽作品との関わりは薄いように思われた。これらも発達段階に合わせて無理のない範囲で学習に取り入れたい要素である。

このように、集団で学習する中で、共感することと他者との違った見方がぶつかることの両方が作用することで、個と集団の両方が音楽的により高まり、音楽する楽しさの分かち合いが実現されるものと期待して、題材を設定し授業を実践した。

(1) 題材名 音楽で世界の旅 ～私たちの国の音楽は？～

- (2) 目 標
- ・アジアや世界の音楽を意欲的に鑑賞したり表現したりするとともに、日本の音楽文化について関心を持つ
 - ・日本の伝統的な音楽の旋律や響きの特徴を感じ取り、その特徴を生かした表現を工夫することができる
 - ・世界各地の様々な音楽の特徴を聴き取ることができる

(3) 音楽科としての学びと規範にかかわって

自然環境や歴史、言語、生活風習が異なるように、国や地域によって音楽もまた様々である。国際化の進んだ今日、学校教育の場でも、自国の文化に対しても外国の文化に対しても、ともに関心を持ち尊重する態度が求められるようになっては久しい。日本に独自の音楽文化があるのと同じように、様々な国や地域にはそれぞれ独自の音楽文化が存在する。その中でも地理的、歴史的に関連の深い東アジアには、日本のそれと形態の似かよった民族楽器や音の響きの似かよった音楽も見られる。そのような観点から、アジアを中心として世界の音楽を楽しむ本題材「音楽で世界の旅」は、「日本の伝統的な音楽」の学習と一対のものにとらえ、本題材を設定した。

現代の子どもが日ごろもっとも親しんでいる、あるいは耳にしている日本の音楽は、「さくらさくら」、「越天楽今様」、各地の民謡といった純邦楽ではない。むしろ6年生にもなると、楽器の演奏に長けていたり、ポピュラー音楽やクラシック音楽などの洋楽を楽しんだりしている子どもさえ多い。そのような音楽好きの子であっても、「私たちの国の音楽は？」と問われると、漠然とした認識しか持てないか、あるいは自分にはなじみの薄い伝統的な音楽をイメージするぐらいしかできないであろう。つまり伝統的な音楽の学習は、多くの日本人にとってそれが非日常の文化になってしまった今日、子どもが「活動を心から楽しむ」という規範に結びつきにくくなっていると考えられる。

学習を進める中では、単に楽しさや美しさを求める表現、もの珍しい興味の対象としての鑑賞にとどまるのではなく、各自の音楽とのかかわりや自国の文化に対する考えを意識させるような投げかけが大切であろう。世界地図やメディア機器などを用いた視覚に訴えるような課題の提示やまとめ方、実際の和楽器にふれる体験、様々な音源、画像の提示なども効果的であろう。そうして音楽文化の無国籍化、多国籍化が進んでいる中でこそ、子どもに自国の音楽文化に対する探究心を持たせ、日本らしい音楽、日本の特徴的な音楽を見つけ、表現できるような活動の場を設定したい。最終的には好みや感覚のレベルで結論の分かれるテーマを持つこの学習を通じて、一人一人が様々な音や音楽に「素直に反応する」、「他者の表現を共感的に聴く」という規範に迫りたいと考える。

(4) 集団のよさが息づく授業へのアプローチ

① 「学びのシェア」とのかかわりから

本題材では、最初から日本の伝統的な音楽を形式的、分析的に表現したり鑑賞したりするのではなく、世界やアジアの音楽を聴いたり歌ったりして親しみながら、一人一人の判断、感覚で日本の音楽を見つめ直していくという流れで学習活動を進めたい（つかむ→もとめる）。音楽についての子ども好みや感覚は各人各様であり、楽しみ方も様々であろう。だからこそ他者とのかかわりによって個々の表現の仕方がより高まったり、音楽的嗜好のよりよい変容につながったりすることが期待されるのであり、それがまさに集団で学ぶことのよさであると考え（ひろげる）。

② 規範について

それぞれの思いを持ち寄って私たちの国の音楽を考え、選んだ曲を表現する時は、似た考えを持つ子同士でグループになり、その音楽を選んだ思いを共有しながら歌唱や演奏に取り組みさせた。そうすることによって音楽する楽しさを分かち合い、よりよい表現をめざすという規範意識が高まっていく。また、それぞれのグループが異なる視点で日本の音楽を選び、発表し、聴き合うという活動からは、様々な表現方法を知り、音楽性を高めるといった音楽的な規範意識も培われていくと考えられる。

学習計画（総時数 8 時間）

	主な活動と内容	主に意識する規範	評価のポイント
つかむ	1 アジアや世界の音楽を聴いたり歌ったりする ・マップをつかってまとめてみよう ・「アリラン」「太湖船」を歌ってみよう ・いろいろな国や地域の音楽を調べて聴いてみよう ・コンピュータやCDなどを使って楽器についても調べてみよう	(1)	アジアや世界の音楽に興味を持ち 進んで調べたり鑑賞したりすることができる 世界各地の音楽の特徴を感じ取り 楽しんで歌ったりすることができる
	2 日本らしい音楽 日本の特徴的な音楽を考える ・「越天楽」や「春の海」ってどんな音楽だろう ・「日本の音楽」として紹介するならどんな音楽がふさわしいだろうか ・グループごとに練習して 歌や演奏で発表しよう (考えられる題材) 「越天楽」冒頭部分の合奏 箏をつかった「さくらさくら」 唱歌 童謡 わらべ歌 民謡 芸術歌曲 etc.	(1)(2)	日本の伝統的な音楽の響きの特徴を感じ取ることができる 課題にあった音楽を見つけ グループに分かれて表現の仕方を考えようすることができる 曲想にあった表現の仕方を工夫し 協力して練習ができる
ひろげる	3 グループごとに 日本の音楽についての考えをもとに歌や演奏を発表し合う ・どの曲もよく聴いたことがあるよ ・いろんな音楽があるんだね ・私たちがあんな曲 演奏してみたい ・日本の伝統的な音楽もおもしろいなあ ・時代が変わると音楽も変わっていくんだ	(2)	お互いのよさを見つけながら聴くことができる いろいろな日本の音楽のおもしろさに気づくことができる
	4 日本の伝統的な音楽を楽しむ ・箏を弾いてみよう ・カラオケで民謡を楽しく歌ってみよう	(1)	旋律の特徴や楽器の響きを感じ取りながら伝統的な音楽を楽しむことができる

教室の規範 (1) 活動の楽しさを分かち合う

(2) 友だちの思いや表現の仕方を認め、そのよさを自分にも生かそうとする

③ 評価について

題材に対する興味関心が学習の動機づけの大きな要素となると考えられるので、まず鑑賞したり歌ったりしている子どもの姿そのものの観察が大切である。また自己評価活動としてふりかえりや感想などを書かせる場合には、自分と異なる音楽に着目した他者の感覚やその表現の仕方が、自分の考え方にどう影響したか、自分の表現活動にどのように生かしたか（これから生かせようか）をしっかりと意識できるものにしたい。そして集団で学ぶよさを具現化するためにも、他者の感じ方や評価をその子どもにもう一度返すようにして音楽的高まりをめざそうとする意欲に結びつけたい。

(5) 本題材における授業の実際と考察

① アジアや日本の音楽と出会う活動

日本の民謡だけでも非常に数多くあるというのに、世界の音楽をいろいろ聴いてみるというだけでは、視点の定まらない漠然とした活動になりかねない。そこでこの実践では教科書に掲載されたアジアの楽曲の鑑賞から学習を始めて日本の音楽へと焦点を移していった。ここで扱うアジア各地の曲はどれも、おそらく子ども達全員が初めて耳にするものであろうと思われる。楽曲の説明は極力省き、第一印象を短く書かせるようにして、次々と鑑賞した。

このような形では、子どもには自分自身が持っている経験や情報しか鑑賞の手がかりとなるものがない。それでも多くの子はそのような手がかりをもとに生活体験とも照らし合わせて音楽に向き合っていたことが以下のような感想からうかがえる。いずれも多くの子が書いた内容である。

美しい草原（モンゴル）を聴いて

ターザンやライオンキングのようなイメージ。とっても広い草原で歌っている感じ。

ラグパティ（インド）を聴いて

太鼓の響きが「インドの奥」という感じ。インド料理のお店で聞いたような気がする。

ブンガワン ソロ（インドネシア）を聴いて

ハワイの音楽に似ているよ。フラダンスでも踊っているような様子が目に浮かぶ。

田植え歌（フィリピン）

日本の田植えのイメージとぜんぜん違う。元気でノリがよく、田植えが楽しそう。

一方「春の海」や「平調越天楽」（「越天楽今様」のもととなった曲。冒頭部分のみ）は、成り立ちや作曲者、楽器について必要最小限の説明をした上で鑑賞した。この2曲については、「京都の感じがする」「お正月にいつも流れている」（春の海）、「けっこうたくさん種類の楽器を使っているようだ」「結婚式や初もうでの時に神社で流れていた」（越天楽）というようにほとんどの子の感想が似たようなものであった。

集団で学ぶよさについて言えば、この活動（楽曲との出会い＝つかむ）では、他者の感想を自分のそれに反映させ、自分なりの最初の感想からすぐに一歩考えを広めた子も多かった。

- ・〇〇さんが、「音楽からフィリピンと日本の田植えの様子が違うんだな」って比べていて、すごいなと思いました。
- ・〇〇さんは「ていんさぐぬ花」は日本らしいって言っていたけど、△△さんは日本なのにほかの民謡と違う感じがするって言っている。沖縄の音楽は少し違うようだ。
- ・「春の海」は、最初の有名なところだけじゃなくって、〇〇さんは「真ん中に速くなる部分があった」って、曲全体のつくりにも注意して聴いていた。

② 日本らしい音楽について考える活動

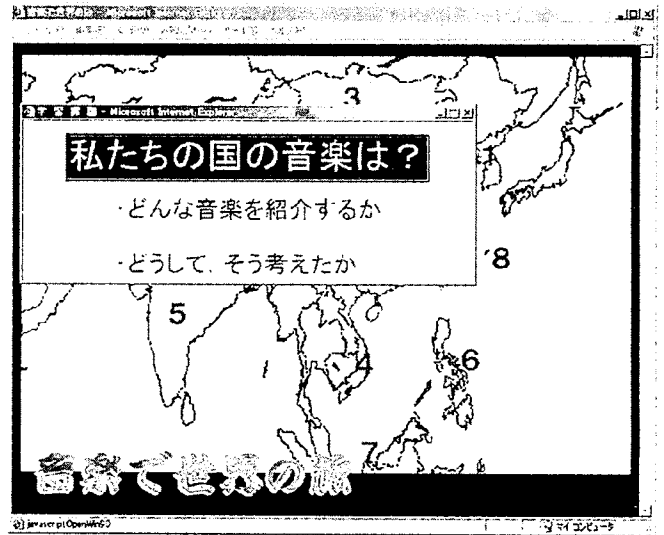
この実践では学習課題やアジア全体の地図などを、常置したプロジェクターでスクリーンに投影して提示した。効率よく授業を進めながらも視覚的にグローバルな見方で考えられるようにするための手立てである（資料1）。

この画面のようにアジア全図の中で日本を考えた場合、日本らしい音楽としてどのような音楽を紹介すればよいものか、活動①で出会った各国の音楽や5年生の時までに出会った日本の音楽を参考にして一人一人に考えさせた。当初の子どもの提案とその曲を選んだ主な理由は以下の通りである。

■ひとりひとりが考えてみよう

学習課題 **わたしたちの国の音楽は？**

わたしなら きしかいよ	そう考えたのは 日本の民謡から リカの音楽合間に選んでる / 日本代表
わたしなら 日本の楽器 くらくら	そう考えたのは 日本の音楽で日本の音楽は くらくらはいいけど、日本の楽器 から



資料1 地図上をクリックすると曲名が表示され聴くことができる（日本をクリックすると課題が表示される）

ふるさと・もみじ・おぼろ月夜などの唱歌

有名 みんな知っている 5年生で勉強した 日本の風景がうかぶ 田舎の感じ
日本は豊かなところというイメージ 心が落ち着くいい歌 ゆったりしている

ソーラン節などの民謡

日本を楽しく表現できる 日本独特 日本の楽器も使える 世界に通用

君が代

国歌だから 古い歌 「昔からの日本」という感じ 三味線とか日本の楽器が合いそう

さくらさくら

日本の花 日本のことでひくと合う

箱根八里

威勢がいい 何だか日本らしい

海を題材にした歌・・・A児

島国日本 海のない国の人にもそのよさを

「日本らしさ」をどこにおくか（例／音のつくりか、演奏する楽器か、歌詞にうたわれた自然や生活感か）を明確に指示しなかったこともあり、視点や理由の不明確さが目立つ。そんな中でA児だけが曲やジャンルを指定せず、自然風土と関連付けて海を題材にした歌として提案した。A児はヨーロッパでの生活経験があり、大陸と島国の風土と文化の違いを自然に実感しているのかもしれない。

これらさまざまな考えを全員が出し合い、他者の考え方に共感したり自分の思いと比較させたりしながら話し合っている様子の一部が以下の記録であるが、これは決してクラスで一つの結論にまとめようとするものでなく、一人一人が交流しながら考えを明確化させようとする（もどめる）ものである。

- C1 : 「ふるさと」がいいと思います。聴いただけで田舎の風景がうかんでくる。
- C2 : 「もみじ」がいい。紅葉の様子が表されている。
- T : (風景画を提示して) こんな感じだね。でも自然や風景を歌った音楽以外にも日本らしい音楽ってない？
- C3 : 「君が代」。国歌だからみんな知っている。
- C4 : でも、アジアのいろいろな音楽を聴いたけど、国歌じゃなかったよ。
- T : たしかに国歌じゃない曲ばかりだったけどね。
- A児 : 曲は決めてないんだけど「海」が表されている曲がいい。日本人が海とともに生きていることを外国の人に伝えたい。
- C5 : (ボードに提示された) 「ソーラン節」だと海に関係のある民謡だよ。

この話し合いを経て、自分の思いを客観的にとらえ明確化したり、より高まったりした子がいる一方で、それまでの自分の思いが変容した子も多くみられた(写真1)。

・「日本」を表していると思うものが人によって違っていることにおどろいた。そして曲の感じ取り方も違っていった。

・私が感じたこと以外にもいろんな感じ方があったのでなるほどと思いました。その感じ方にひかれて「君が代」から「ふるさと」になりました。

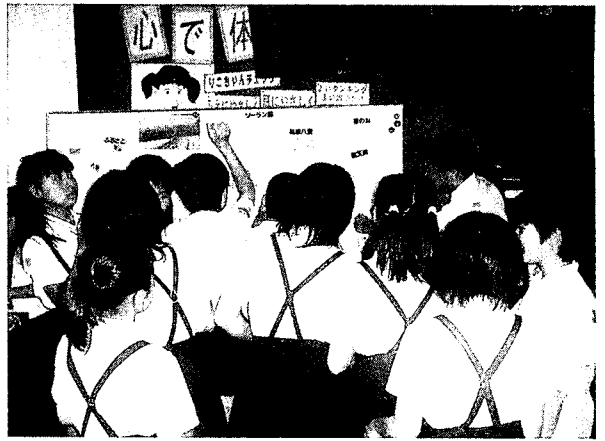


写真1 話し合いのあと思いの変わった子ども

③ 考えをもとに音楽を表現し合う活動

次に自分たちが「日本らしい音楽」として選んだ楽曲を表現し合う活動に進んだ。音楽では考えを話し合うばかりでなく、その思いを実際に音にして伝えることが大切であることは言うまでもない。それによりまた一人一人の考えが確かなものになったり変容したり、そして広がったりすることが期待されるのである（もとめる→ひろげる）。

まず「箏の音色を聴いてほしい」（さくらさくらに組みむグループ）、「歌詞から日本の自然の様子を感じ取ってほしい」（もみじを歌うグループ）というように、自分たちの選んだ曲で伝えたいこと、聴いてほしいところを意識させた。その上で同じ曲を選んだ子同士でグループを作り、曲の発表に向けての練習を始めさせた。日本の音楽に対する共通の思いや似たような感覚をグループ活動の動機としたことで、個々の技能に差はあっても楽しそうに練習が進み、「伴奏譜をほしい」「もっと練習させてほしい」といった前向きに取り組もうとする声が続いた。最終的な発表の形態は以下の通りであった。

- ア. 「もみじ」「ふるさと」「おぼろ月夜」／ピアノまたはオルガン伴奏と歌唱 リコーダー
- イ. 「さくらさくら」／箏とリコーダー
- ウ. 「越天楽」冒頭部分／リコーダー 鍵盤ハーモニカ 大太鼓等による合奏
- エ. 「箱根八里」／無伴奏による斉唱
- オ. 「君が代」／独唱とピアノ伴奏
- カ. 民謡各種／解説と鑑賞…A児

このうちアでは3～5人程度のグループが唱歌を演奏したのだが、まだ学習していない「ふるさと」を二部に分かれて歌ったり、リコーダーで演奏したりと、これまでに学んだことを活かしながらよりよい表現を目指そうとしていた。

イは箏とリコーダーとのアンサンブルであるが、実際の和楽器の活用が何より効果的で、聴く子どもたちも実に興味深そうであった。次の④の活動では子ども達に自由に触れさせる場を持った。なおここでは、比較的手軽に扱うことができ、本物と遜色ない響きのNeo箏を使った。

注目すべきは、カの民謡を取り上げたグループである。「島国日本らしく海を題材にした歌を伝えたい」としたA児は、そのA児の思いに共感したとした子といっしょになってグループを組んだのである。そしてソーラン節などの民謡を発表しようとしたのだが、さすがに短時間に思いを込めて民謡を歌えるようになることは困難である。そこで「みんなに民謡をいくつか紹介してはどうだろう」とアドバイスしたところ、A児が中心となって早速CDを聴いたり図書で調べたりして準備を始めた。そして「大漁節」（千葉県）や「花田植」（広島県）など数曲を日本の伝統的な農林水産業と絡めた簡単な解説とともにグループでプレゼンテーションしたのであった。

いずれも集団の中でのかかわりと集団相互のかかわりが学習意欲に結びつき、自然な形でより音楽性を高めようとするエネルギーになったのであろうと推測する。

④ 日本の伝統的な音楽を楽しむ活動

ここまでは、一人一人が思いを持ちながらグループで活動してきたのだが、ある楽曲について聴き手と発表者と分けてしまうのでは、そのまま集団で学ぶよさにつながるとは言い難い。その子の音楽体験をより豊かなものにするためには、どこかのグループが取り上げた楽曲や楽器であっても、クラスみんながそのおもしろさを実感できるような場が必要である。それが他者のよさや音楽的な感覚の受容と自分の音楽的な高まりにもつながると考える（ひろげる）。

ここでは「楽しむ」という要素も盛り込みながら二つの活動をおこなった。

まずみんなが箏に実際に触れてみる場を設定した。平調子に合わせた3面の箏と十分な数の爪を用意することができ、誰がどう弾いてもそれこそ「日本らしい」響きを実感できたようであった。また実物の珍しさだけでなく調弦法や日本音階にも興味を持った様子もうかがえた。

もう一つは民謡をカラオケで歌ってみたことである。前述のように音楽室にはパソコンと接続されたプロジェクターとオーディオ装置が常置されており、インターネットとカラオケソフトを使って「ソーラン節」「こきりこ節」を全員で歌った。こういう場合カラオケだと歌詞、メロディーともにすぐにつかむことができ、また和楽器の音色も十分に美しく、学校教育の場で民謡を楽しんで歌うには、実用的かつ効果的で、子ども達も大喜びであった。

(6) 題材を終えて

言うまでもなく音楽の好みや感覚は同じ学習集団の中であっても各人各様である。その中で他者の考えに影響されて自分の考え方が変容することだけが集団で学ぶよさではあるまい。共感したり時には批判的に向き合ったりしながら、自分の思いを確固たるものにして、音楽性を高めていくことこそ集団で学ぶよさである。そのことを意識しつつ、この実践では幅広い音楽作品を子ども達がそれぞれの感じ方、表現の仕方で楽しみ、かかわり合いながら学習活動を進めてきた。

以下に載せた子どものふりかえりはそれらを示すものである(資料2)。これまで気づかなかった視点に気づくだけでなく、A児のように他者との違いを肯定的にとらえながらも自分の思いを強くするといった、まさに集団の関わりの中で生まれた子どもの学びがここにある。

2. 友だちの選んだ「日本らしい音楽」の発表をきいてどう思いましたか、自分の考えと照らし合わせて、学んだことをふり返って見ましょう。

きくらを選んだのは「ソウラン節」で「えんそう」らしい。「リコーダー」ときくと、外国のようなくらい「和」して、合わないリズムが「和」の音なと思っていたけれど、きいてみると、とても「和」とあっていて、日本らしいえんそうになっていて、びっくりしました。「ソウラン」も他の楽器と合わせると、日本らしい音楽になるんだったと思いました。

2. 友だちの選んだ「日本らしい音楽」の発表をきいてどう思いましたか、自分の考えと照らし合わせて、学んだことをふり返って見ましょう。

私がえんそうは「日本らしい」には「民謡」や「海」の出てくるものでした。みんなの発表をきいて、他のうたにもいろいろと「和」は思いましたが、やっぱり心は変わりません。

資料2 ふりかえりからみる気づきと変容(左)と
思いの確立(A児 右)

最高学年であり、音楽の技能に優れた子の比較的多い学級集団であるとはいえ、短時間の自由なグループ発表で、しかも不慣れな曲を美しく表現することは大変難しいことである。しかしこの学習では美しく演奏することだけが目標ではない。むしろ美しさやおもしろさを見つけよう、求めようとする心を育てることが大切だと考える。それが音楽という世界の中で視野を広げ、自分の感性を高めていくということであり、それにはこのような集団の中での出会い(様々な考えとの出会いと様々な音楽との出会い)がやはり欠かせないのである。

(7) 今後の課題

教師にとって、一人の子どもが実際にどれほど「感覚的に磨かれたか」「音楽性が豊かになったか」といったことを具体的に検証することは難しい。また子どもの側から見れば、自己満足できるくらいにその音楽に夢中になることも大切だが、自己満足で終わっては音楽性の高まりには結びつかないということである。

つまり、意欲や関心は、よりよいものを求めようとする実質的な行動につながるように、そして一時のものに終わらないようにしなければならないのである。そのためには適切かつ効果的な題材の提示と継続的で個に応じた支援をおこない、いろいろな題材や学習の場面、いろいろな方法で評価を積み重ねて分析していくことが必要であると思われる。

この実践例に関連して言えば、情報化のすすんだ現代では、TVやCDなども含めて幸いにも世界の音楽文化にふれる機会は珍しくない。また学校教育の場でも伝統的な音楽にスポットが当てられるようになってきた。そのような場面で積極的に目を向け、耳を傾けようとする子になってほしい。それを評価し支援を重ねていくことで、単に「音楽が好き」という状態から「音楽のこういうところがおもしろい」「だから音楽ってすばらしい」と言える状態に育ってほしいと考えるのである。